



黙示録の記録

第4章 御座の周り

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

序章 未来をひもとく書

第1章 栄光のうちにある人

第2章 しみやしわやそのようなもの

第3章 誘惑の時

第4章 御座の周り

第4章 御座の周り

キリスト来臨の約束

黙示録

キリストから教会への最後のメッセージは、今の時代の教会活動とその心構えに関する限り完結しました。使徒パウロは、ローマ、コリント、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ、テサロニケの七つの代表的な教会に聖霊の導きによって教訓を書き残しました。また、ヤコブ、ペテロ、ユダ、ヨハネの四人の使徒は七つの書簡を書きました。さらに、著者不明のヘブル人への特別な手紙の他に、パウロは、テモテへの手紙Ⅰ、Ⅱ、テトス、ピレモンへの四つの牧会書簡を書きました。教会は、キリストが再び来られるまでに出会う可能性

のあるすべての出来事に対して、必要で十分な指針を受け取ったのです。彼らは、この時がどのくらいなのか知りませんでした。もちろん、彼らは、常に、注意し目を覚まししているようにキリストに強く勧められていたのです。

けれども、この時点まで、初代教会の人々は、キリストの再臨後に起こることについてはほとんど知らずにいました。もちろん、彼らは旧約聖書の預言を持っていたし、そこには多くの情報がありました。

しかし、二つの問題がありました。第一に旧約聖書で、教会と教会時代は奥義とされています。「この奥義は今、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした」〔エペソ人への手紙3章5節〕。したがって、イザヤ、ダニエル、その他の預言は、大体イスラエル民族に集中し、他の民族に関しては、彼らとイスラエルとの関係に焦点が合わせられていたのです。しかし、初期のクリスチャンたちは、教会の将来について旧約聖書からほとんど引き出すことは出来なかったのです。

第二に、旧約聖書の預言は、その時代の終わり頃に成就する出来事と、まもなく成就する出来事の混じりあった特徴を持っていました。もちろん、創造主は時間に束縛される方ではありません。なぜなら、創造主は宇宙空間と物質と同様に時間をも創造されたので、創造主は、すべての時代のすべての出来事の未来・現在・過去を、あらゆる面にわたって同時に見る事ができるのです。数千年によって分けられた二つの出来事を創造主は本質的に一つの出来事としてご覧になります。最初の出来事は第二の出来事の前ふれであり、あの出来事は最初の出来事の当然の帰結で、前者の延長線上にあるのです。

初代教会の時までに、バビロン補囚・諸民族に対する裁き・メシヤの初臨など、旧約聖書の多くの預言が主イエス・キリストご自身、特にオリブ山で語られたすばらしい預言の経過説明〔マタイによる福音書24章、マルコ13章、ルカによる福音書21章〕で、これらの問題の多くをわかりやすく説明されましたが、この中にさえ紀元七十年にエルサレムが滅びるといふ近未来に成就されることと、この時代の終わりに成就することが入り混じっていました。キリストは、十字架に架かれる前に、教会時代について部分的にしか説明されませんでした。その多くはキリストの復活と昇天で、聖霊が、「やがて起ころうとしていることをあなたがたに示す」〔ヨハネによる福音書16章13節〕という聖霊の教える使命〔マタイによる福音書13章9、17、34、35節、ヨハ14章25、26節16章12、15、25節〕の後のことは、彼らには十分には理解できなかったたとえをもって説明されました。

実に、聖霊は使徒の書簡を通して、やがて来るいくつかのことを啓示されました。しかし、これらは、特に後の時代に、教会に影響を及ぼすような世の一般的動向と大いに関係あるものでした〔テモテへの手紙4章1〜3節、IIテモテへの手紙3章1〜13節、ヤコ5章1〜8節、IIペテロの手紙3章3〜13節、Iヨハ2章18〜20節、28節〕。これらの一つも、特別な出来事と関係があるものはなかったのです。そして、その傾向はすでに多くのところでも明らかにされていました。したがって、当時彼らが世の動きを語る事ができた限りでは、(また、それについて今日私たちが語ることができる限り) 教会時代の初期にあったこれらのことは、終わりの時代にもあり得るのです。

さらに、これらの手紙には、確かに教会のために、キリストが実際に再臨(特に大いなる復活と携挙〔Iテサロニケ人への手紙4章13節〜5章10節とIコリ15章50〜52節]) される事に関しての出来事が多く啓示されていました。それより

範囲は少なくともありますが、記事が、ピリピ3章20、21節、コロサイ人への手紙サイ3章4節、テトス2章11〜13節、ヘブル9章27、28節、10章25、37節、Iペテ1章3〜7節、1ヨハ3章2、3節、ユダ14〜18節に部分的に書かれています。しかし、もう一度言いますが、花嫁である教会のためにキリストが帰って来られるという、大いなる真理以外のどの出来事とも関係がありませんでした。

さらに、これらさえ、なお、近い将来、そして遠い未来で成就されることが混じり合っていることを暗示する、ある種のまぎらわしい要素が含まれていました。例えば、ある預言は、死者と生きている者とを問わず、彼に従う者はたちまち携え挙げられて空中で主を見ると言います「Iテサロニケ人への手紙4章16、17節」。他の預言は、キリストはイスラエルを救うためにシオンから来る「ローマ人への手紙11章25、26節」とあります。キリストご自身は、大いなる患難のすぐ後に、栄光と力をもって地上に帰って来る「マタイによる福音書24章21、29節」と言われ、その大患難は預言者ダニエルによって語られた「荒らす憎むべき者」が聖なる所に立つ「マタイによる福音書24章15、21節」までは始まらないと言われました。警告は、エルサレムの宮に荒らす憎むべきものが立つまでは、どの世代の人にも無意味に思われるでしょうが、それでも、同じ話の中で、聴衆に「あなたがたも用心していなさい。なぜなら人の子は、思いがけない時に来るのですから」「マタイによる福音書24章42節」と強く勧められています。

キリストの再臨に関連した一連の出来事は、十字架以前の人のとって十字架の意味がはっきりしなかったように、十字架以後のキリストに従う人々にとってもまだ不明瞭です。キリストの再臨は、初臨と同じように、少なくともかなりの期間と多くの異なる出来事が組み込まれていることが認められます。しかし、旧約聖書のまだ成就されずに残っている預言のすべてを分類(区分け)し、調和させることを教会に可能にさせるため、これらの他に最終的な預言がまだ実際に必要でした。このような預言は、キリスト在世中にキリストによっ

て与えられたものであり、弟子たちを通して、やがて来る時代に、創造主の創造の大いなる目的に関する真の保証と理解を持って準備するために与えられたものです。

これが、覆いを取り去る書のそもそもの目的です「黙示録1章1〜3節」。使徒時代のまさに終わろうとしていた時に準備され、そして、教会時代の終わりまでに必要としている残された総てすくのことを取り扱ったキリストの教会に対する最後の指図を与えた後、主は、次いで、黙示録4章から始めて、キリストの再臨と永遠の統治に関する大いなる出来事のすべてを、キリストの僕たちしもべに示すことに着手されました。

碧玉の虹

黙示録4章1節　その後、私は見た。それは天にある開いた門である。すると、先にラツパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言った。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」

これは黙示録において実に大切な節です。原文は「これらの成り行きの後」という同じことばで始まり、同じことばで終わっています。「この後」ということばは、黙示録1章19節で、主によって示された預言の第三の区分としっかり結びつける働きをしています。「あなたの見た事、今ある事、この後に起こることを書きしるせ」(すなわち「これらの後に」)。この時点で、主は、ヨハネにこれらの出来事の後に来る事を示し始められたのです。すなわち、それは「今ある事」と、2〜3章に書かれているように教会と関係した出来事の後です。この時点で始まる出来事は、地上あに在るキリストの教会とキリストとの関係が完結した後に起こら

なければならぬことを明らかにしていると思われれます。そして、今、キリストは地球に関するもつと差し迫った問題に注意を向けているのです。したがって、これに続く十八の章で概説されている大いなる出来事すべては、教会の創設については全く触れていません。

では、教会に何が起こったのでしょうか？ その答えは明らかです。エペソにある教会のように、その燭台が取り去られ〔黙示録2章5節〕、もし生き残っていたとしても、もはや真の教会ではないのです。ある教会は、テアテラに在る教会〔黙示録2章22節〕のように、彼らの邪悪さのゆえに「大いなる患難に投げ込まれ」ています。彼らの邪悪さは、彼らがキリストをまったく知らなかったことと、知りながら偽りの教えに従ったことで証明されたのです。しかし、フィラデルフィアの教会のように、他の教会は「地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練」〔黙示録3章10節〕から、彼らの主によって恵み深く守られるのです。

しかし、どのようにして、このことが成就するのでしょうか。その答えは、ヨハネの経験を通してこの時点で明らかに与えられています。黙示録の目的は、将来起こる大いなる出来事を単に語るだけではなく、示すことでした。そして、このことはヨハネ〔黙示録1章1節〕を通して不思議な方法で示すことによってなされるはずでした。ヨハネはこれらの出来事のすべてを直接見ました〔黙示録1章2節〕。ヨハネはそこにいました。これは夢ではなかったのです。まして幻でもなく真の出来事でした。

主は、フィラデルフィアの教会の人々に、門を開いておく約束しました。そして、ラオデキアの教会の人々には、彼らが閉ざした門をキリストが叩いて注意していました。今やキリストは、天の門が開かれている事をヨハネに示し、彼に入るように招いたのです。その声は、黙示録1章10節の「ラッパの音」として最初に聞いたのと同じ声だったのです。

やがてラッパの響きとともに主が来られることが、聖書の他の所にも述べられています。「主は号令と、御使いのかしらの声と、神（創造主）のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。」〔イテサロニケ人への手紙4章16節〕。「ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」〔イコリント人への手紙15章52節〕。

ラッパの響きを伴った招きは「上ってこい」というものでした。門が天にあり、ヨハネは地上にいましたが、主はヨハネに先だって天にいました。そして、今ヨハネは、天で主に会うために上って行こうとしていました。事実上、ヨハネはキリストの再臨の時、生きている信徒の一人になったのです。「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」〔イテサロニケ人への手紙4章17節〕。「わたしは、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」〔ヨハネによる福音書14章3節〕。

黙示録4章2節　たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天にひとつの御座があり、その御座についている方があり、

ラッパのような声が大声で招いたあと、「たちまち一瞬のうちに」〔イコリント人への手紙15章52節〕、ヨハネは天にいました。そこでは、やがて起こる大いなる出来事すべてが、彼の眼前で繰り広げられていました。パウロはかつて同じように、肉体のままであったか肉体を離れてであったかはわかりませんが、「第三の天」「パラダイス」に〔イコリント人への手紙12章3節〕移されていましたが、彼が見たことを人に語ることは許されなかったのです。

パウロは、はるかかなたの空間に移されたが、ヨハネは空間と時間の両面で創造主の御座に、そして時代の終わりに移され、彼が見たことを述べるように命じられました。私たちの肉体は現在空間と時間の奴隷ですが、創造主は物質とともに空間と時間をも創造された方なので、これらのすべてを支配できます。ヨハネは不思議にも、このような大いなる奥義を「靈に感じて」経験したのです。実際に、彼はキリストが再臨される時、聖徒たちに起こる大いなる「携拳」にあずかったのです。そして彼は、彼らと同様に瞬時に天に引き上げられた自分自身に気づいたのです。

実際に、特別な天は大気の上空高くにある天でしょう。イエスが地上から昇った時、天使は弟子たちにキリストは「同じありさまで」帰って来られると語られました「使徒の働き1章11節」。今の時代の終わりにキリストは「天から下って来られる」「イテサロニケ人への手紙4章16節」が、最初は地上にまつすぐ帰って来るではありません。生きている信者と死んだ信者の両方が「空中で主と会うため」「イテサロニケ人への手紙4章17節」に引き上げられる時、復活と栄化を受けます。それはまさに、ヨハネが呼び出されたその所であったように思われます。

ヨハネは地球の近くの天で、ギリシャ語の意味で「据えられた」美しい王座にその日の私たちを見たのです。「もろもろの天よりも高く」「エペソ人への手紙4章10節」あつた、天の御座はまたたく間に宇宙空間を横切り、地球の周りに移されました。「義をもつてこの世界をさばくため」「使徒の働き17章31節」に来られる時が、最終的に訪れたからです。

ヨハネが見た御座は、ローマ人への手紙14章10節、コリント人への手紙第II章5章10節で述べられているすべてのクリスチャンが、「キリストのさばきの座」の前に出なければならぬ座とまったく同じ可能性があります。救いの問題は信者にとって、すでに片づきましたが、信者は報酬を受けるか失うか、彼らの行為に応

じてさばかれなければならないことを示している多くの聖句があります「マタイによる福音書12章36節、イコリント人への手紙3章11〜15節、ガラテヤ人への手紙6章7節、コロサイ人への手紙3章24、25節、IIテモテへの手紙4章1〜8節、黙示録22章12節など」。このさばきは千年期の前に終わらなければなりません。なぜなら、信者はその時まで聖徒の「正しい行ない」を表わす白い衣を着せられて、千年期の間に「勝利を得る者に約束されている裁きの座が与えられる」「黙示録19章8節、20章4節」のです。黙示録の6章から19章に書かれている裁きは、地球とそこに住むキリストを拒否した人々に対してで、天で報酬を与えられるために設けられた信者の裁きとは関係ありません。したがって、クリスチャンのさばきが起こりうるのは、ただ、携拳の直後・地球に災害が解き放たれる前だけという事になります。教会に当てた七つの手紙の各々の最後の部分で、「勝利を得る者」に対する約束は、「この火がその力で各人の働きの真価をためす」「イコリント人への手紙3章13節」時に、キリストの裁きの座で幾つかの褒美が分配されることです。何十億人という信者が空中で主の前に集まります。そして栄化された人の子の、火のような目と炎のような顔が、信者の肉体と心からすべての汚れやまざりものを、またたくまに追い出します。ヨハネのように私たちは「死人のように彼の足の下に」「黙示録1章13〜17節」倒れるでしょう。それから、「私たちはキリストに似た者となります。なぜなら私たちはキリストのありのままの姿を見るからです」「イヨハネの手紙3章2節」。そこには豊かな報いがあるのです。

黙示録4章3節 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があつた。

この御座が「キリストのさばきの座」と同じか否かは別として、この時点での光景は、裁きの座で行なわれる罪の浄化、報酬の分与と続くように見えます。今や、眺望は、地に対する裁きの準備段階のひとつです。三位一体の創造主は御座にいます。その満ち満ちた様は、テモテへの手紙第16章16節にあるように「光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることも近づくこともできない方」で、よみがえった聖徒でさえ見ることも描写することもできません。そこから発する光は見えますが、ヨハネは見て、その言いようのない美しさを書きました。それは虹の七色のすべてからなっています。

実際に、エメラルドの緑色が強調されている美しい虹は、完全に御座を取り巻いていました。しかし、御座に座す創造主からの光は、虹のスペクトルの両端の二つの色、赤と紫でかたどられていました。おそらくヨハネに裁きと犠牲を語りかける赤は、サルデス市の名の由来である血の色をしたサルディーン石を思い出させたことでしょう。多分、創造主の忠実さを物語っている紫は、水晶の透明さをもつ紫の碧玉でした〔参照・黙示録21章11節〕。虹の緑は、創造主が地上の被造物世界を覆った新緑のようでした。これらのすべての景観は創造者、支配者、贖い主としての創造主をほめたたえていました。

虹は非常に重要です。聖書は虹について四回言及しているだけです。最初は創世記9章〔13、14、16節〕で、洪水、そして主とすべての生き物との間になされたノアの契約の印であると認識された後に、創造主が初めて虹を架けられた時です。この「永遠の契約」とその契約を示す虹は、決して再び世界を滅す大洪水を送り込まないと創造主が世に約束するものでした。このように虹は、創造主の裁きの最中でさえ、人類に対する創造主のあわれみを物語っているのです。

虹に関する第二の告示は、エゼキエル書1章28節の創造主の栄光に関するエゼキエルの幻に見られます。

ヨハネが「霊で」見た光景は、エゼキエルが幻で見たケルビムと虹に取り巻かれた創造主の御座にとてもよく似ていました。「その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、」〔エゼキエル書1章1節〕とある通りです。

第三の場面が、ここ黙示録4章3節と、もう一度10章1節にあります。ここでも、まさに創造主のご臨在とご性質を連想させられます。虹が絶え間なく創造主の御座を取り巻いているのは明らかです。そうだけでなく、少なくとも、創造主の裁きが地をおとずれたエゼキエルの日、ノアの日、ヨハネの日には、虹が御座の回りを取り巻いていました。いわば、虹はさばきのため、創造主を敬わない文化の刈り取りの最中でさえ、信者が残っている事を思い起こさせます。そして、「あらゆる恵みに満ちた創造主」は「怒りのうちにも哀れみを忘れない」〔1ペテロの手紙5章10節、ハバクク書3章2節〕方なのです。

贖われた人々の長老たち

黙示録4章4節　また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。

御座ということばはギリシャ語のスロノス thronos で、「throne」「王座」に用いているのと同じ語です。ヨハネが見た長老たちは、彼が御座に座っている創造主の御臨在を見たように、その通りに御座に座っていました。〔黙示録4章2節〕。時には、誤って天使と解釈されているこれらの長老たちの実態は実に大切です。

長老たちは、まちがいに罪が贖われ、栄化された人たちであり、次の点を考慮すると少なくともこのよ
うな人々の代表です。すなわち、(1)天使の階級組織に支配権と力がありますが、天使の階級には「長老たち」
はあり得ません。なぜなら、すべての天使は同じ年令で、おそらく創造の第一日に創造されたのですから。(2)「長
老」ということは、聖書のどこでも常に人にだけ用いられている。(3)長老たちは、イスラエルでも教会
でも常に選ばれた代表であり、人々の指導者である。(4)十字架以前にはすべて贖われた人々の霊は、なおハ
デスに閉じ込められていた、というのが事実なので、イザヤ書6章、エゼキエル1章〜10章にある創造主の
御座の幻の中に長老たちはいない。(5)長老たちは白い衣を着(黙示録3章5節に勝利を得た信者たちに約束
されたような)、勝利者の冠(また、黙示録2章10節と3章11節で勝利を得る者に約束された(ギリシア語ス
テファノスII「花冠」))をつけていた。それなのに、「仕える霊」である(ヘブル人への手紙1章14節)天使たちは、
何らかの冠をつけたものとして聖書に決して記されていない。(6)黙示録5章8、9節で、これらの長老たちは、
御自身の血で彼らを贖って下さった小羊に対する賛美の歌を歌う。

しかし、なぜ二十四人の長老たちなのでしょう？ イスラエル人は、出エジプト24章1節で七十人の長
老たちを用いたし、初代教会では長老の数に関して何の指示もありません。イスラエルには、祭司の長が
二十四人いたが(「歴史誌24章7〜19節」、これらの人々は長老ではなかった。たとえ信者たちが王や祭司であると
しても(黙示録1章6節)、祭司の職が天における長老職と混同される理由にはならないと思われます。二十四と
いう数は、しばしば十二人の族長に十二人の使徒を加える象徴と考えられてきました。しかし、使徒たちは
マタイ19章28節で千年王国の時代に十二の王座に座ってイスラエルの十二の部族をさばく仕事が割り当てら
れているのに、二十四人の長老たちは天の御座にいます。もしこれらの十二人が十二人の使徒たちで、十二

部族をさばくために割り当てられているのなら、他の十二人の正体と役割は判らないままなのでしょう。か。
彼らがヤコブの十二人の息子である可能性はほとんどありません。

なお、彼らが誰であるかを判定するために興味深い資料が、他にひとつある可能性があります。「長老」と
いう用語は管理上の、また年代的な意味を持っています(「1ペテロの手紙5章1、5節」。黙示録にある長老たちは個々
の人々であり、すべての信者の単なる象徴でないことは、個々の長老たちについて記録された個人的な会話
により示唆されています(黙示録5章5節、7章13節)。彼らはすべての時代のすべての信徒の代表ですが、彼らは個々
の人々であり、すべての贖われた人々の長老たちです。創世記のなかで約束された子孫の系図に挙げられた
二十四人の族長たちがいる事は、この問題の興味深く可能な答えです(アダム、セツ、エノシユ、ケナン、
マハラルエル、エレデ、エノク、メトシエラ、レメク、ノア、セム、アルパクシャデ、シエラフ、エベル、
ペレグ、レウ、セルグ、ナホル、テラ、アブラハム、イサク、ヤコブ、ユダ、ペレツ)。これらの人々ほどの
だれよりも創造主に使われた「長老」を表わすのに最も相応しい人のはずです。最後に別の可能性は、主は
長老たちがだれかを特定しておられません。ですから、彼らを選ぶ主の方法は、功績に基づいてなされてい
るのです。こうして、創造主はキリストのさばきの座で報酬が割り当てられるまで、彼らがだれであるかを
明かすことはできないのです。

黙示録4章5節 御座からいなすまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神(創
造主)の七つの御霊である。

御座がエメラルドの虹に取り囲まれていましたが、裁きを監督する恵みを表わしていて、いわば、御座そのものから裁きの声が出てくるかのようです。ノアの大洪水の前（大洪水に続いて虹が制定された）、地上には雨が降らず〔創世記2章5節〕、その状態は、透明な水蒸気の全地を覆う天蓋（大空の上の水）によってもたらされ、創造の第二日に創造主によって制定されました。この熱をもった水蒸気の覆いによって維持された温室効果は、洪水前にゆきわたっていた亜熱帯性の快適な恒久的気候を支えていました。強い風もなく、したがって雨も雪も降りませんでした。大いなる水の源〔創世記7章11節〕の張り裂けは、天蓋の凝縮と降雨を惹き起こしました。そして、その結果、地球全体を覆う大洪水が起りました。

詩篇29篇は、この大洪水を詩的莊嚴さを持つことばで描写しており、主が七回叫ばれた「主のことば」につづく出来事に焦点を合わせていました。最初の発声の水を解き放ち、第二の発声が天から大いなる雷鳴をもたらし、水蒸気が凝縮し、動き始め、歴史上で最初の最も激しい大気圏での磁気嵐を引き起こしました。創造主の御座から発せられるこれらの「雷鳴と声」は、過去における大いなる裁きの時と、もう一度地上で始まるうとしている大いなる裁きの時を反映しています。しかし、創造主はノアに対する約束にしたがって地球を滅ぼさずです。

七つの御霊〔参照：黙示録1章4節〕は、今や裁きの光景と調和して、七つのともしびととして現われます。聖霊は目に見えず、どこにでもおられますが、時には、目に見えるように現われます。例えば、イエスがバプテスマを受けられた時のハトのようにです〔マタイによる福音書3章16節、マコ1章10節、ルカによる福音書3章22節〕。聖霊はペンテコステの日に「炎のような舌が分かれ分かれ」に現われました〔使徒の働き2章3節〕。聖霊の働きの一つは「罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせ」〔ヨハネによる福音書16章8節〕ることです。聖霊は長

老たちと共に御座について、聖霊は地に有罪を宣告する働きを実行し続けるのです。

ケルビムとセラフイム

黙示録4章6節 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。

御座の前にあるガラスの海（確かに御座の前にある海は四方八方すべての方向にあって、すべての被造物から動かない権威の座を分けています）は、明らかに幕屋にある洗盤に対するもの〔出エジプト記30章18、21節〕で、宮にある海〔II 歴代誌4章2、6節〕です。共に主の働きに仕える前に、祭司の身をきよめるために使われました。けれども、天の宮において海は動かず水晶のようにじっとしています。祭司たちはすでにきよめられているので、そのまま海の上を歩くことができ、直接主の前に入ります。水晶の海は出エジプト記24章10節とエゼキエル書1章22節に記されているように、創造主の二つの幻の中にも見えているのかも知れません。

四つの獣（ギリシャ語ズーン「生きている生き物」）は、法外な思索の題目になっています。彼らに対する紹介のことばは、彼らは御座の回りを取り巻いているということです。各々の側にひとつ、どの被造物よりも創造主に近く御座の真ん中にいたのです。こうしてこれらの生き物は天使の階級で最も高位にあり、彼らは創造主の御座のすぐそば近くにいるのです。さらに彼らは身体中に目があつて、どの方向にあるものもひと目で見る事が出来るので、彼らの目から逃れられるものは何一つないのです。彼らの真の名「生きている

もの」は、彼らの創造者なる創造主によって彼らに分け与えられた生命を持つ活気に満ちた存在であるという事実を表わしています。これらは長老たちのように現実の存在であり、象徴ではありません。彼らはまた、一団として〔黙示録4章9節、5章14節〕または個々〔黙示録6章1、3、5、7節〕にも語ります。しかし、彼らは長老のような人ではなくて、天使たちで、創造主の面前に関係する一組の特別な役割のために特別に創造された存在なのです。

黙示録4章7節 第一の生き物は、ししのようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶわしのようであった。

ギリシャ語はズーンで、英語のズー=zoo=(動物園)とかzoology(動物学)ということばはこのズーンという言葉に由来しています。ですから、欽定訳英訳聖書の訳者は、「獣」という言葉を用いたが、この語は単に「生きているもの」を意味します。これらの生きているものの外観は、エゼキエル書1章10節に書かれている四つのケルビムの外観と似ていることがわかります。「彼らの顔かたちは、人間の顔であり、四つとも、右側にししの顔があり、四つとも、左側に牛の顔があり、四つともうしろに鷲の顔があった」。けれども、エゼキエルは次のようにも言っています。「その中に何か四つの生き物のようなものが現われ、その姿はこうであった。彼らは何か人間のような姿をしていた。彼らはおのおの四つの顔を持ち、四つの翼を持っていた。」〔エゼキエル書1章5、6節〕

この描写は力ある四人の天使のようなケルブの一つでその各々四つの顔を持っているようです。四つの顔はライオン(野性の動物のうち最も偉大な)と牡牛(家畜のうち最も偉大な)、鷲(飛ぶ動物のうちで最も偉大な)、そして人(すべての生きものうち最も偉大な)を示しています。ヨハネとエゼキエルの記述で順序が異なっているのは、単にそれらを観察した地点が異なっていた結果であることは明らかです。これらがケルビム(ヘブル語でケルブの複数形)であることは、エゼキエル10章20〜22節に述べられていました。彼らの四つの顔の三つは他の生物を描写していたとしても、彼らの風貌はみな人に似ていました。契約の箱の上にあった二つのケルビムの彫像から判断して〔出エジプト記20章17、22節〕、各々の人に似た顔は、たぶん創造主の御座の方に向いていたことでしょう。彼らは向きを変えないでどの方向にでも行く事が出来ます〔エゼキエル書1章12節〕。

ケルビムはアダムとエバが追放されてから、エデンの園の入り口に置かれていました。ケルビムにふれている所はどこでも、象徴的(幕屋や神殿の場合のように)であろうと、また(ヨハネによる福音書やエゼキエルの描写のように)事実であろうと、ケルビムの存在は創造主の面前を表わしています。

イザヤもまた天の宮についてのすばらしい幻を見せられました。そこで彼は「セラフイム」〔イザヤ書6章1〜7節〕と呼ばれる確かに天使のような存在を見ました。セラフイムということばは「火のようなもの」を意味していて、彼らはおそらく同じか少なくともケルビム(その根源的意味はわからないが)と同じ階級のものという意味しているのです。エゼキエルはケルビムを次のように記述しています。「それらの生きもののようなものは、燃える炭のように見え、たいまつのように見え、それが生きものの間を歩き来していた。火が輝き、その火から、いなずまが出ていた」〔エゼキエル書1章13節〕。イザヤ書6章2節のセラフイムと黙示録4章8節の生きている生物は共に六つの翼を持っていると言われているのに、エゼキエル書1章6節のケルビムは四つの翼を持つ

ていると言われています。

しかし、おそらくエゼキエルの四つの翼は飛ぶための翼で、二つは前後に動くための、二つは左右に動くための翼と思われまゝ。それに追加されてイザヤの幻で言われていた各々の顔を覆いかくしている二つの翼は、二つは顔を覆いかくすため、二つは足を覆い隠すためのものです。

黙示録4章8節 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神（創造主）であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」

さらに、これらの生き物とセラフィムが同じであることは、万軍の主に終わることのない創造主を讃える三重のことば「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。」「イザヤ書6章3節」を出し続けている彼らの職務によってわかります。これらのケルビムとセラフィムは、創造主の被造物の中で最も荘厳な美しいものである（墮落したケルブ、明らかにサタンは、エゼ28章11〜19節で「知恵に満ち、美の極みであった」とも言われている）事は確かで、彼らは創造主にすべての栄光を帰しています。三位一体の創造主の過去、現在、未来の働きに対して「聖なるかな」が三回繰り返し返されている関連は明らかです。創造主は創造の御業、贖いの御業、また完成の御業において完全に聖なる方です。

創造を讃えることば

黙示録4章9節 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、

ヨハネの目前にある目ざましい光景は、今、新しい活動に向かって動き始めます。栄光に満ちた復活と聖徒の携挙は終了し、彼らの罪は一掃され、報酬が与えられ、彼らの長老たちは、彼らのために用意された王座を引き受けました。四つの生き物たちは、今や主に対する聖なるかなの絶えることのない繰り返しを変えて、聖なるかな、聖なるかなだけでなく栄光と誉を主に帰す新しい主題に着手します。「誉れ」という用語は、「評価」を意味することばです。主はすべてにふさわしい。

しかし、彼らも主に感謝しています。彼らは贖われた人々の仲間ではなく、なぜなら彼らは決して道をふみはずしたことはないのです。したがって、彼らの感謝の讃歌は、11節から明らかのように、彼らが造られた事実とサタンと人の反逆の全時代を通して守られた事実と焦点が合わせられているに違いありません。

聖書で感謝に対する最後の三つの引用が、すべて天にある御座の前でなされているのは注目すべきです。すでに述べたように、最初は、創造主の創造の働きに焦点が合わされました。第二回「黙示録7章12節」は、主として、創造主の救いのわざに關してです。最後「黙示録11章17節」は、偉大な完成の業を予期しています。「長老たち」だけが三つの場面「黙示録4章10節、7章11節、11章16節」のすべてに参加しています。贖われた者だけが創造主に対する感謝の完全な意味を知っています。

黙示録4章10節 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。

四つの生き物が、いわば、永遠に生きておられる方に栄光、誉れ、感謝を彼らの行為によって台図する時、二十四人の長老たちは、同じように賛美のコーラスに加わります。この行為が、長老たちが代表する何百万もの贖われた男女によって、順次続けられるのもまた真実らしい、そして、長老たちもまた御座についておられる方の前に畏敬の念をもってひれ伏します。

彼らが創造主の御座の前にひれ伏す前に、彼らは自分の王座から降りなければなりません。さらに、勝利を得ている信徒としてその忠実な奉仕に対し報酬として与えられた美しい冠が、突然何か不相応に思われるのです。彼らの忠実ささえも、キリストの忠実さによって可能にされていることに彼らは気づきます。与えられていないものを彼らは何も持っていないのです。すなわち、彼らはただ主が意図され可能にされたことを成し遂げたに過ぎなかったのです。すべては創造主に属します。したがって、彼らの冠は実に彼ら自身のものではなく、冠を主にお返ししなければならないのです。

その上、彼らを導く主をみつめ、その頭には多くの冠があり〔黙示録19章12節〕威厳に満ちた主を見ながら、彼らの贖い主に伴って地上に勝利の凱旋をするのはなんとすばらしいことでしょう。彼らは実際に王であり祭司とされていて、彼らの働きに応じて報酬が与えられているけれども、贖われた聖徒一人ひとりの最大の喜びは、古い信条にあるように、ただ「主を永遠に喜ぶ」こと、そして、各々の人生で主の目的を成し遂げることだけです。

「そのしもべたちは神（創造主）に仕え、神（創造主）の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神（創造主）の名がついている。」〔黙示録22章3〜4節〕

黙示録4章11節 「主よ。われらの神（創造主）よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

創造主が本当に贖い主として知られる前に、最初に創造主として信じられ、認められなければなりません。この大いなる創造の賛歌が二十四人の長老たちによって捧げられていることは重要です。復活し、キリストのさばきの座で報酬を与えられた後、最初の応答として、すべての聖徒が確かにこの賛美をかなでます。このことは現在活躍している多くの「福音主義者」たちの態度とは著しく異なっています。彼らは、創造の教義は付随的重要性を持つにすぎないと考えています。また多くの人は、進化は創造主の創造の手段であったと言ふほどに無神論と妥協してさえいるのです。

贖われた者に栄光があるわけではありません。彼らに対して、すべてのもの（すなわち、存在しているものは、ただ創造主の独創的意図によるというだけです。彼らは「創造された」のであって、（進化論者が仮定しなければならぬように創造されつつあるものではありません。）有神進化論として知られている体系は、科学与聖書に矛盾するし、創造主の恵みと力はずかしめるものです。

「みこころ」ということばはギリシャ語のテレマで、通常は、意図と訳されており、聖書でこのことばが最後に出てくるところです。新約聖書で最初に出てくるのは、主が弟子たちに祈りを教えられたところ（「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」〔マタイによる福音書6章10節〕。その祈りに対しての最後の答えを黙示録で予知しています。そしてこの「みこころ」が最初に出てくるところは、完成を待ち望んでいます。ちょうど、最後に出てくるところで創造を振り返って見ているようです。創造主のみこころは永遠であり、創造主にとって初めと終わりは総て一つなのです。

この創造主を讃える歌は、また、創造主がなぜ、すべての物を創造されたのかという問題に答えています。それは単に、創造主のみこころであったというだけです！ 私たちの心そのものも創造主によって造られたのですから、そうなされた創造主のみこころに疑問を持つのは生意気というべきでしょう。

「主はすべてのものを、ご自分の目的のために造り、悪者さえもわざわざいの日のために造られ」〔箴言16章4節〕、「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った」〔イザヤ書43章7節〕。「なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか」〔ローマ人への手紙11章34節〕。「しかし、人よ。神（創造主）に言いさからうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか』と言えるでしょうか。……ですが、もし神（創造主）が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださいとしたり、どうでしょう。それも、神（創造主）が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせ

てくださるためなのです。」〔ローマ人への手紙9章20〜23節〕。

正確に率直に調査すると、創造主がすべてのものを創造された証拠は、圧倒的にあります。以上のような（以上のような事象で）、このような全能の創造主が、また全知であることを私たちは確認できるのです。また創造主は気紛れな方ではなく、主のみこころは申し分なく正しいことを、私たちは完全に確信しているのです。創造主の創造を説明し正当化することは、私たちが必要としている動機ですべてです。

それゆえ、創造主だけが「栄光、誉れ、権力」を受けらるべき方です（ギリシャ語原文には定冠詞がついている）。人も天使も何物も物を創造することはできません。確かに行き当たりばったりの出来事で、物をつくることも組み立てることもできません。ただ創造主のみが創造でき、実際に創造されたのです！ 存在するすべてを永遠に卓越した人格を持つ創造主が、特別に創造されたという事実だけに立ってはじめて存在の意味と説明を見出し得るのです。

